

編集者の Hocking (2018) によれば、第 25 巻第 2 号の 12 編の論文のテーマは、主に、作業的挑戦と作業科学の哲学（考え）である。本書評では、作業的挑戦（肯定的も否定的も含む）に関する論文 3 編、哲学に関する論文 1 編、最後にその他の論文 1 編について紹介する。

Carandang & Pyatak (2018) は、ライフスタイルの中で健康を維持するための作業的挑戦を慢性疾患（糖尿病）者の経験から論じている。ここでは、作業的挑戦とは、本人が身体的健康維持とアイデンティティーに基づく日常の作業のバランスをとるために、日常の文脈の中で継続的に作業的選択がなされることであると指摘した。

Trentham & Neysmith (2018) は、在宅ケアサービスの権利擁護活動をしている高齢者グループの経験を参加型アクションリサーチにより分析した。高齢者差別のために、高齢者たちの作業役割や作業的可能は制限されているが、陳情書活動、定例会、資料作成、発表会などの作業を使った作業的挑戦を展開した変革的アプローチを例示した。

Peoples, Nissen, Brandt & Cour (2018) は、在宅生活を送る進行がんの人々の主観的生活の質と作業を介した所属との関連を理解するために質的研究を行った。他者と一緒にあるいは他者のために作業することは、所属感を持ち継続することを可能にすることを示した。一方、孤立の経験は所属感に挑戦（脅威）になっていたことが示された。

Bailliard, Carroll & Dallman (2018) は、これまで意味ある作業参加の研究において、身体的側面がしばしば見過ごされてきたので、Merleau-Ponty の身体性の概念を使って、これに挑戦した。結果、Merleau-Ponty の述べた知覚と行為の概念が、主体的な身体が作業参加の経験を作り上げていることを作業科学に示すとした。さらに、Merleau-Ponty の哲学は、身体には過去の経験が沈殿し、そこから知覚の指向性（意味や指向弓を含む）をつくりあげていると述べたことが作業科学の将来に役立つことを示唆した。

最後に Aldrich, Gupta & Rudman (2018) の論文を紹介したい。研究目的は、作業科学の博士論文が、作業や作業的存在としての人間を研究することに、どのように方向づけられているのかを明らかにすることであった。対象は、北米にある 4 つの作業科学の博士課程の修了生による 101 編の博士論文の抄録で、分析には定方向的な内容分析 (Hsieh & Shannon, 2005) が用いられた。その結果、作業と作業的存在に関する知識に直接的な貢献の認められた論文は 40 編、その意図が明確ではないが、文脈や作業参加、健康、特定の種類の作業のように、人間作業に関連のあった論文は 29 編、両者に該当しなかったのは 32 編で、それらは身体機能やそれが行動に与える影響、作業療法サービスなどに関する論文であった。その他にも、対象論文の研究内容を示すコードの一覧、分析方法、修了生の卒業後の貢献に関する結果も示されているため、興味のある方はぜひ参照していただきたい。

鹿田将隆（常葉大学）、小田原悦子（自宅所属）

文献（引用順）

- Hocking C. (2018) Editorial. *Journal of Occupational Science*, 25(2), 155-158.
- Carandang K & Pyatak EA. (2018) Analyzing occupational challenges through the lens of body and biography. *Journal of Occupational Science*, 25(2), 161-173.
- Trentham BL & Neysmith SM (2018) Exercising senior citizenship in an ageist society through participatory action research: A critical occupational perspective. *Journal of Occupational Science*, 25(2) 174-190.
- Peoples H, Nissen N, Brandt Å & Cour KL (2018) Belonging and quality of life as perceived by people with advanced cancer who live at home. *Journal of Occupational Science*, 25(2), 200-213.
- Aldrich RM, Gupta J & Rudman DL (2018) Academic innovation in service of' what? The scope of North American occupational science doctoral graduates' contributions from 1994–2015. *Journal of Occupational Science*, 25(2), 270-282.
- Bailliard AL, Carroll A & Dallman AR (2018) The Inescapable Corporeality of Occupation: Integrating Merleau-Ponty into the Study of Occupation. *Journal of Occupational Science*, 25(2), 222-233.
- Hsieh HF & Shannon SE. (2005) Three approaches to qualitative content analysis. *Qualitative Health Research*, 15(9), 1277–1288.

翻訳協力者

小田原悦子（自宅所属）

近藤知子（杏林大学）

鹿田将隆（常葉大学）

高島理沙（北海道大学）

西野由希子（湘南医療大学）

村上典子（うるまの虹）